あの日あの頃

私の原点

剣の道で「己に打ち勝つ」強さ磨く

●ジーアンドエスエンジニアリング
児玉和久 社長

山口県萩市出身の〝長州人〟である祖父の影響で始めた6歳から、これまでずっと剣道とともに人生を歩んできたと言っても過言ではない。剣道を通じて鍛えた忍耐力と、物事を継続していくことの大切さは、今も会社経営のさまざまな場面で役立っている。

15歳の時には親元から離れ剣道の修行をするように言われ、当時、剣道の強豪校として全国に名をとどろかせていた北九州市の常磐高校に進学することになった。寮などはなく、納屋のような建物の2階に同級生と二人で住み、寝袋での生活を強いられるなど過酷な環境だったが、剣道部では恩師となる部長の故・柳井秀一先生から教えを受けた。

柳井先生は30年間にわたって、同校剣道部を指導されており、「常磐高校の剣道を育て上げた」と評された方で、作法に非常に厳しく、人間形成を重んじた指導は、何度も

常磐高校の剣道を育て上げた柳井秀一先生（後列左から2人目）

全国レベルで強豪校としてならした常磐高校剣道部時代

「百雑砕」の言葉を胸に一心に竹刀を振り続けた日々

逃げ出したほどの激烈さだった。だが、この時期に「人としてどうあるべきか」という基本を徹底的にたたきこまれたことは、その後の人生の基盤となっている。

当時の常磐高校剣道部は玉竜旗高校剣道大会やインターハイなどの優勝常連校で、先輩たちも私たちの代でも何度か全国制覇を成し遂げていた。常勝軍団を鍛える道場は常に緊迫感に包まれており、面打ちなどの基本練習を念入りに行い、その後は1対1の打ち合いから、試合形式へと続く。そうした我々を見張るように掲げられていたのが「百雑砕」と書かれた部旗だった。百雑砕（ひゃくざつさい）は禅語で、「あらゆるものを木っ端みじんに打ち砕く」という意味だが、振り下ろす竹刀で雑念を打ち砕き、剣の道に猛進せよ、との思いが込められていた。

対戦相手に勝つというのも重要だが、剣道の根幹にあるのは「礼に始まり礼に終わる」である。そもそも剣道は剣術に由来しているため、人を傷つけることを模した競技だからこそ、ただ相手と競い合うだけでなく、相手を尊重し敬う大切さや、人に感謝できる謙虚さを学ぶことができなければ、上達しない。剣道という競技では相手に勝つことが目的なのではなく、自己との向き合い方が重視される。「敵は己にあり」と見定めることで、自分に勝つことこそが勝利に値することなのだ。

それを示す言葉が「残心」である。剣道や同じ武道である弓道などでも見られるものだが、残心は、技を仕掛けた後、相手の反撃に備える姿勢をとらなければならないという武道で見られる特殊なルールである。剣道では面や胴がきれいに決まっていても、この残心のない技は1本として認められないことがある。弓道でも矢を放った後の姿勢が重要なのと同様である。

勝っても気を緩めず、相手を軽んじず、謙虚な心で競技に臨むことの重要性を説くのが残心であり、剣道の精神が体現されている言葉である。ただ勝てばいいというものではなく「勝ち方」が厳しく問われるものなのだ。自分に勝つことから逃げた姿勢で、たとえ運良く試合で勝つことができても、本当の意味では勝ちではなく、実際そうした試合をした後には、指導者にこってりと絞られたことも少なくない。

また、昨今、高校野球などのスポーツにおけるガッツポーズの是非をめぐって議論が起きているが、剣道では厳しく禁止されている。審判規則の禁止行為に「審判員または相手に対し、非礼な言動をすること」と記載されており、これも礼に始まり礼に終わるという剣道の精神からきている。高校野球でも大げさなガッツポースは敗者への配慮に欠ける行為として慎むべきとされているが、一方で慎むことへの批判もある。剣道ではそうした議論もないほど、相手への非礼になるような勝者のおごった態度は何よりも厳しく戒められている。古くから伝わる武道には「人の道」に通じるものが多分にあるように思う。